

昨年末に発生した“新型コロナウイルス”は、年が明けると瞬く間に北半球に拡散しました。現在では、第2波、第3波への対応と“アフター・コロナの世界”に関心が移り、長引く対応に、社会や経済の“価値観”が大きく変わってきました。コロナ禍は、富裕層と貧困層の格差を顕在化し、その格差は、“緊急宣言解除後”益々拡大して、明確になっています。

我が国は、第二次世界大戦で大きな犠牲を払った後、輸出に重点を置き、海外企業との価格競争力を高めるために企業の効率性を追究してきました。さらに、“観光立国”を目指して、海外からの旅行者（インバウンド）を最優先顧客として受入体制を急いでできましたが、その仕上げ段階で今回の“コロナ禍”が起こってしまいました。

コロナ禍の中で、“Stay Home”を余儀なくされて、日本では中々進まなかったテレワーク（リモートワーク）、オンライン会議、オンライン授業（ウェビナー）が急速に拡大しています。また長い在宅期間に、多くの人々が“断捨離”を行ない、未使用の衣服、家庭雑貨や書籍などを処分しました。この長い在宅期間がもたらした副産物として、多くの人々の行動が、“SNSによる情報入手の手軽さ”だけでなく、新聞やニュースを聴いて、“自らが熟考し判断する大切さ”に気づいたこ

とだと思えます。

さらに多くの人々が、感染者数、死亡者数の報道から、“死の恐怖”を意識し、“生き残っていることの貴重さ”を再認識しました。その結果として、社会のために自分がやるべき事、自分の死後に続く世代に何を残さなければならぬかを考えました。コロナ禍は、基礎的な物資の国内自給率が低いことが“危機管理（事業継続）”を進める中で致命的であることを教え、“グリーンリカバリー”を目標に、故郷の自然（里山）を守り、農業や林業の大切さを再認識しました。

これからも“アフター・コロナの世界”の中で、国際IC日本協会が果たす役割を考えて、一人一人が、“熟考する習慣（静かな時間）”を持ち続け、周りの人々とリスクコミュニケーションを深めたいと思います。最後に、ご年配の会員が多い当協会において、コロナ禍の中で、くれぐれもお体を大切にされ、益々お元気で過ごされることを祈念いたします。



東北アジア青少年フォーラム及び日韓学生討論会中止のお知らせ 理事 成 豪哲

当協会では、本年8月24日から8月31日にかけて、本年度の東北アジア青少年フォーラム及び日韓学生討論会が開催予定であることをご案内しておりましたが、この度、MRA/IC 韓国本部より、新型コロナウイルス（COVID-19）の影響による各行事中止の一報を受け、本年度の参加募集をやむなく正式に中止とさせていただきますこととなりました。

大変残念ではありますが、当協会では、来年度の開催に向けて、関係諸団体と連携の上で引き続き努力してまいりますので、どなた様も時節柄どうぞご自愛くださいますようお願いいたします。

事務局からのお知らせ

今年のIC国際フォーラムは、10月24（土）～25（日）の予定です。昨今の状況から、オンライン会議形式が主体となると思われますが、昨年と同じ川崎市国際交流センターも会場として使用する予定です。詳細は追ってHP等でお伝えして参ります。

なお、会員相互の感染防止のため、会員の皆様も事務所へお立ち寄りになることは当面お控え下さいますようお願い申し上げます。皆様のご自愛のほど祈念申し上げます。



公益社団法人 国際IC日本協会

発行年月日 2020年7月25日  
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会  
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20  
バレ・エテルネル206号  
TEL: 03-6273-1428 FAX 03-6273-1429  
E-Mail: info@iofc.jp HP: http://iofc.jp  
<International IofC>HP: www.iofc.org

頒価 1部 100円

静かな時間と私 会長 矢野 弘典

国内だけでなく国境を越えたネットワークを通じ、ICの皆様の間で「静かな時間」を共有する活動が広まっております。そのような場を積極的に主催し、あるいは進んで参加しておられる方々に、心から敬意を表します。

コロナウイルスが蔓延する中で、対外的な活動が制約されているときこそ、このように落ちついて考える時間が必要だと思います。一人ひとりが内面的に考え、内省し、これからの自分自身や家族、さらには社会の在り方について思いを深め、IC（MRA）の役割についても志を共有することができるものと信じます。

拙宅のパソコンは旧式で環境設定ができないため、皆様の集まりには参加できませんが、家内と私とは毎日夜明けに「静かな時間」を持つよう、長年の習慣として続けています。心の安まる、物事を決めるためにも貴重な時間です。時間帯は異なりますが、皆様と思いを共有していることをお伝えいたします。

「静かな時間」のことを私が知ったのは、1976年に、東京で第1回MRA国際会議（現ICフォーラム）が開かれた時です。世界中から魅力あふれる先達が大勢集まり、MRAについての熱い思いを伝えてくれました。日本MRA協会は前年に設立されたばかりで、土光敏夫氏（東芝社長、後に経団連会長、臨調会長）が初代会長に就任していました。当時東芝の労働課長になって間もなかった私は、この会議の裏方を務めるように云われて、何も分からないままに、相馬雪香、イエンツ・ウイルヘルムセン、藤田幸久さん他に初めてお目にかかり、ご指導を受けながらお手伝いをしました。

この国際会議で教わり、深く共感したことが三つあります。

- 1, 「静かな時間」と「内なる声」の大切さ。
- 2, 創始者F. ブックマン博士の名言の数々。
- 3, 内に熱気を蔵しつつ、穏やかで品格ある参加者の魅力。

「静かな時間」と「内なる声に耳を傾けること」については、とりわけ深い感銘を受けました。私は学生時代から東洋的な瞑想や呼吸法に興味を持ち、坐禅の真似事のようなものを実践していましたので、

一も二もなく良く理解し、共鳴できました。

単に漠然と静かな時間を持つのではなく、内なる声に耳を傾けてその指し示すガイダンスに従うところに、大きな意味があります。内なる存在とは「本来の自分」であり、「良心」と言い換えることができると思います。多忙な日常に埋没して、見失いがちな本来の自分を取り戻すこと。せめて1日に1回くらいは、心を鎮めて静かな時間を持ち、本来の自分に直接対面し、その声に耳を傾けることがいかに大切であるかを改めて反省させられました。



私は自宅を開放して月2回ほど、寺子屋「お爺ちゃんの論語塾」を開催し、小中高生に東洋の古典を教えています。しばらく前に小学生の少年と、こんな問答を交わしたことがあります。

先生：毎日1回、朝とか夜とか静かな時間を持つと良いよ。

少年：何が良いの？

先生：君の中の声の色々と教えてくれるよ。

少年：何を教えてくれるの？

先生：善いことをすれば褒め、悪いことは反省させてくれる。

少年：僕の中の声って何？

先生：正直で、思いやりと勇気のある本当の君自身。良心さ。

少年：分かった！！

静かな時間を持って内なる声に耳を傾け、自分を律し、人格を磨いていくことは一生の課題です。到達点のない道程ですが、家庭も社会活動も全てはそこから始まるものと私は思います。そしてまた、その一時はアイデアの源泉でもあり、常にメモ帳を手放せません。

本年3月の定時会員総会では、永年当協会の事業運営にご尽力され私どもをご指導くださいました橋本徹名誉会長が理事を退任され、堀口満智子氏が新たに理事に選任されました。お二人からそれぞれご退任とご就任にあたっての所感・抱負を寄稿頂きました（3月の総会では他に、田中章博氏が理事を退任され監事に就任されています）。

また、橋本名誉会長は本年6月の理事会において特別顧問を委嘱されております。

## MRA/IC と私 名誉会長・特別顧問 橋本 徹

私は2001年5月に、相馬雪香さんの後任として、MRA(現IC)の会長に就任しました。

会長在任中の思い出としては、まず第一に、2007年に、インドIC協会との共催事業として、インドでCIB(Caux Initiatives of Business)の会議を開催したことです。その後、同会議は隔年に開催されております。

第二に、中国国際交流協会との交流事業(2000年に開始)の第2回訪中団の団長として2004年に北京を訪問し、日中間の相互理解を深めるべく交流を行ったことです。日本からは7名が参加しました。

第三は、2005年8月に、韓国IC/MRAの主催で、ソウルにて開催された第2回日中韓青年会議(テーマ:「未来志向的な東北アジアの協力方法の模索」)に参加したことです。中国から17名、韓国から30名、日本から14名の大学生が参加し、熱心に語り合いました。

私は2008年11月に会長職を矢野弘典さんに引き継いでいただき、その後は理事名誉会長として理事会に参加させていただいておりましたが、このほど理事も退任させていただきました。2001年の会長就任から19年間にわたって皆様から頂きましたご支援、ご協力、ご厚情に心から感謝申し上げますとともに、今後とも、国際IC日本協会が、矢野会長の強力なリーダーシップのもとで、「正直、純潔、無私、愛」に根ざした真の世界平和の実現に貢献していけますよう、心よりお祈り申し上げまして退任のご挨拶とさせていただきます。有り難うございました。



## 今から 理事 堀口 満智子

今から、12~13年前になるだろうか？ 某新聞の一面に、“生涯現役”“人生の本舞台は常に将来に在り”という見出しと、当時93歳の女性、相馬雪香さんの大写しの顔写真と記事が強烈に私の目に焼き付いた。それは私の母と同年ということもあったのかもしれない。

その数ヶ月後に、知人を通して、相馬さんとの昼食会のお誘いを受けた。「えっ、あの新聞で見た相馬さん？」と聞いたら、その方だと分かり「行きます、行きます！」と、ミーハー気分、即答した。昼食会の場所であった永田町の尾崎幸雄記念財団食堂に行くと、背筋をシャンと伸ばされた、スラリとした女性が立っておられた。その方が相馬さんで、94歳となられた方と思えない凛とした美しい佇まいでした。昼食会では、

私の席は彼女の真正面、彼女はステーキを美味しそうに、召し上がられた。会話は日本語と英語半々、初対面の私に、「スイスのコーに行ってきたさい！」と言われ、「Yes, someday.」と答えたら、「Right, now. よ！」と、凄い目力でじーっと見つめられ、つい、「Yes.」と云ってしまった事を思い出す。

実は、その時、相馬雪香さんのご存在も存じ上げなかったし、IC協会の事も全く知らなかった。幸いなことに、もう一度お会いする機会があ



り、その時は杖を持っていらした。それでも、週1回は軽井沢のご自宅から東京まで、お一人で新幹線通っていらしたとお聞きし、正に“生涯現役”を実践された方だと尊敬する。

この様な経緯からICに興味を持ち、どの様なグループなのかを自分の目で見て納得したいと思い、Right, now!ではなかったが、2~3年後に、コーとインドのパンチガーニのイベントに参加した。よく他の方々から、素晴らしい所よ、と度々お聞きしていたが、行ってみて素晴らしいを実感した。又、イベントでは、単なる観光旅行とは違う、盛りだくさんのプログラムが用意されていた。

私は東京、横浜に約40年住み、数年前から故郷の九州の佐賀に定住することになったが、ICの会員として、年1回のICプログラム、学校訪問だけは精一杯のお手伝いしている。4名の海外からのメンバーのホームステイはもう何年も協力し回を重ねたので、沢山の方々をお迎えした。受け入れに際しては、特に宗教の問題で戒律による食習慣の違いには一番気を使う。ある年度の受け入れでは丁度ラマダンの時に重なり昼間は一切、

食べない人、肉も魚も食べない人、何でも食べる人これほどまでに宗教と食生活が人々の生活に関係している、飽食の日本人には驚きである。

この国際IC協会(以前の名称はMRA)は、イギリスのブックマン博士により、1938年に創設されたNGO団体で、“武力によらない紛争の解決による世界平和”を標榜し、今日に至るまで活動を続けている。一方で、コロナ菌による恐怖に世界中の人々が驚かされている昨今の現状を踏まえて考えると、領土拡大のために、国境だのと云って陣取り合戦みたいな愚かな戦争は止めて、地球が一つになって、世界平和の実現のために、真剣に考えなくてはいけないと思う。

国際IC協会には、その趣旨に賛同する多くの人々が世界中から集まっている。この多くの仲間と一緒に、今を生きる人々と未来の子供達のために、人々の幸せと平和の実現を願い、いつの日かレマン湖を見渡しながら語り合う日が来ることを、心から願っています。

本年6月の理事会において、新たに大隈尚子理事が副会長に選定されました。現在の足立憲昭副会長・専務理事と併せ副会長が2人となります。大隈副会長に抱負を寄稿頂きました。

## 抱負 副会長 大隈 尚子



皆さまのご推薦により副会長を拝命致しました。

IC/MRAとの出会いは、1976年スイスのコーを訪れ、当時、小学生でありました私は新しい世界で多くの方々に出会いました。その方々に関わり合う中で目にした奉仕の姿勢や優しさは幼

皆さま、日ごろよりIC活動にお心を寄せて頂きまして有難うございます。コロナ禍にあり、ご不安な日々をお過ごしのことと拝察致します。この度、若輩者の私でございますが、会員の

心に強い感動を与え、今も心に深く残っております。その後ICの研修を受ける機会を頂き、ICの理念と共に生きる国内外の人々の生きざまを目の当たりにし、感銘を受け、諸先輩方の背中を追って私も同じように歩んで参りたいと考えるに至りました。幼い頃よりお世話頂いております方々から励ましのお言葉を受けたことが就任の大きな決め手となりました。

いま、この時にあって、互いに思い合い、共にIC活動の歩みを進めさせて頂ければと思っております。

どうぞ引き続き皆さまよりのご指導をお願い申し上げます。